

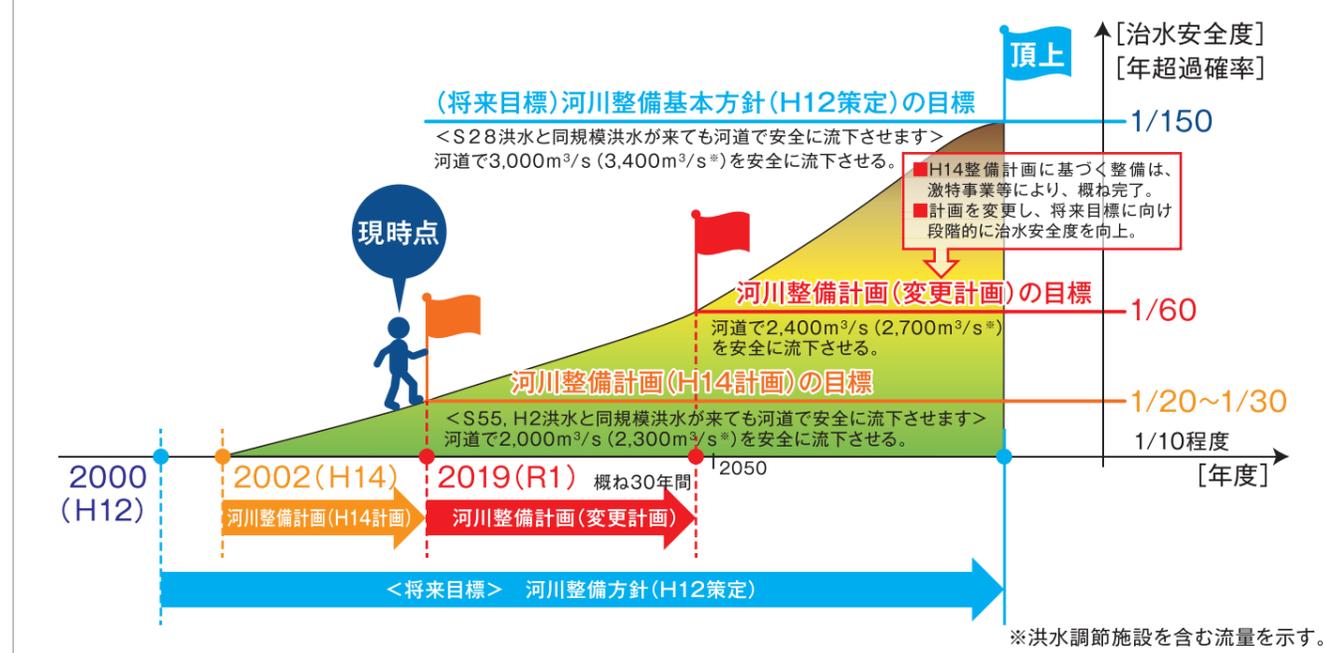
白川の河川整備は、昭和28年6月洪水対応を将来目標としていきます。

激特事業の完了により治水安全度は向上しましたが、引き続き段階的に河川整備を進めていく必要があります。

平成9年の河川法改正を受けて、白川では、平成12年に将来目標として「白川水系河川整備基本方針（昭和28年洪水規模を目標）」、平成14年に20～30年間の河川整備の内容を定める「白川水系河川整備計画（昭和55年、平成2年洪水規模を目標）」を策定し、河川整備を進めてきました。

今回の激特事業等によって、平成14年策定の河川整備計画の河道整備の目標が概ね達成されることから、河川整備計画を変更し、更なる治水安全度向上に向け、引き続き着実に河川整備を進めていきます。

■ 白川における段階整備のイメージ（国管理区間）を登山に例えると



「川の防災情報」
は、大雨時に役に
立つ様々な情報
が入手出来ます。

国土交通省が提供するウェブサイト「川の防災情報」では、
雨や川の水位などの状況をリアルタイムで配信しています

ブックマーク登録しておく便利です。

「川の防災情報」で検索
www.river.go.jp

スマホは
こちらから



国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所

〒861-8029 熊本市東区西原1丁目12-1

TEL 096-382-1111 (代表) FAX 096-382-4253

HPアドレス <http://www.qsr.mlit.go.jp/kumamoto/>

携帯電話用アドレス <http://www.qsr.mlit.go.jp/kumamoto/mobile/>

平成24年7月 九州北部豪雨 白川河川激甚災害対策 特別緊急事業

(国管理区間)



国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所

阿蘇地域で短時間に記録的な大雨が降り、観測史上最高水位を記録する洪水が発生。

家屋が浸水するなど甚大な被害をもたらしました。

■ 短時間に記録的な豪雨が発生

平成24年7月11日から14日にかけて本州付近に停滞した梅雨前線に向かって、南から非常に湿った空気が流れ込み、九州北部では記録的な豪雨となりました。

11日の降り始めから12日24時までに、国土交通省の坊中雨量観測所では観測された最大1時間雨量が124mm、最大3時間雨量が315mm、総雨量517mmとなるなど、短時間に記録的な豪雨が発生しました。

白川流域にある他の雨量観測所(湯ノ谷、内牧)においても、観測史上最多の短時間雨量(1時間、3時間)を記録しました。



■ 観測史上最高水位を記録

7月12日10時30分に代継橋水位観測所(熊本市)において、観測開始(昭和31年)以降、最高水位となる6.32mを記録しました。この水位は、それまでの最高水位の昭和55年8月出水時の5.88mを遥かに超え、計画高水位※6.68mまであと約30cmのところまで達しました。

白川の上流部の阿蘇地域において、3~4時間の短時間に累積300~400mmの非常に激しい雨が降り続いたため、下流部では急激な水位上昇を引き起こし、代継橋水位観測所では、わずか2時間で約4m水位が上昇しました。

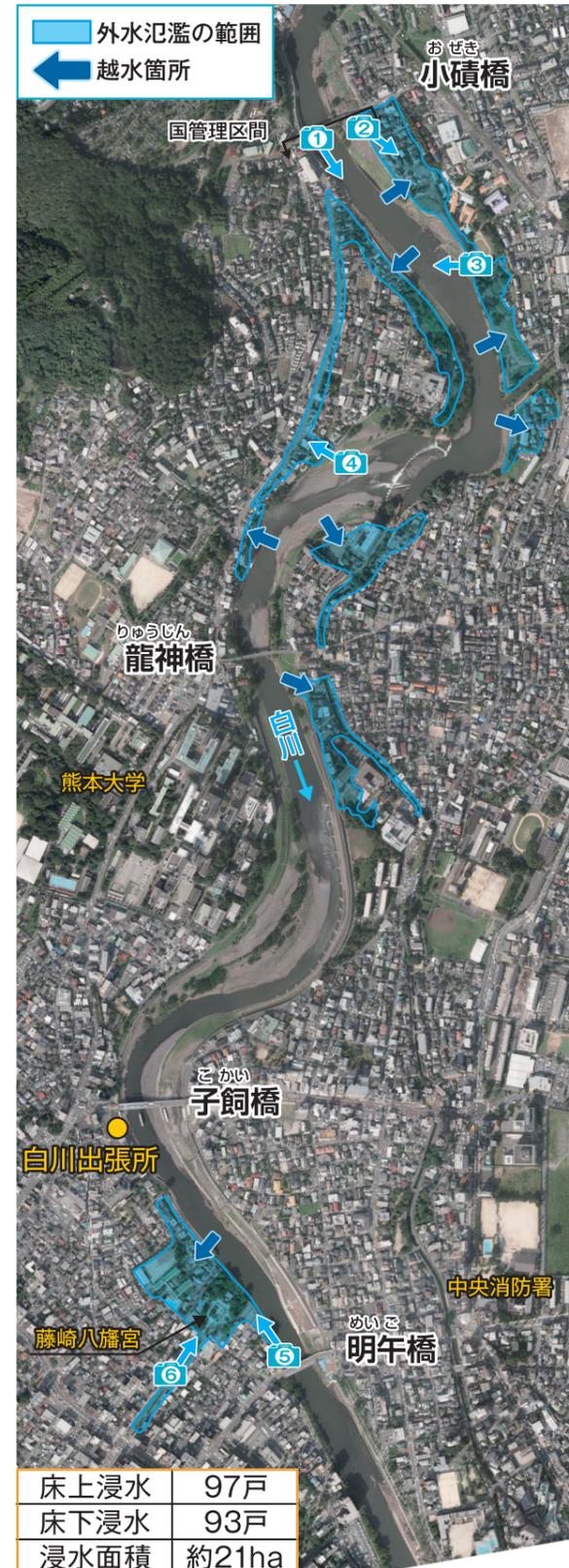
■ 代継橋水位観測所の年最高水位比較



※堤防や護岸などの設計の基本となる水位で、その堤防が耐えられる最高の水位です。この水位を上回る超過洪水では、堤防が危険な状態になることを意味します。

■ 明午橋から小碓橋区間において氾濫被害が発生

平成24年7月の九州北部豪雨では、明午橋から小碓橋の区間において、溢水などによる氾濫被害が発生しました。



再度災害防止を目的に地域のニーズを踏まえ、自然環境への配慮及び「回遊性」「アクセス性」「空間多様性」「安全・安心性」を方針として川づくりに取り組みました

白川河川激甚災害対策特別緊急事業採択後速やかに学識者を含めた「白川激特区分間景観検討委員会」を設置し、模型・パースなどによる討論や現地確認など、合計56回の委員会において検討・協議を行いながら、地域との調和を図りつつ景観や環境等に配慮した設計・施工を行いました。



白川激特区分間マスタープラン

マスタープラン(平成25年1月31日)

- 基本方針
- 1 回遊性
 - 2 アクセス性
 - 3 空間多様性
 - 4 安全・安心性

1. 回遊性

- ① 龍神橋～小碓橋間(3.2km)の堤防整備に伴う歩行者・自転車の快適性、安全性の確保
- ② 特殊堤コンクリートの明度を抑え、周辺環境の中で堤防が主張しない工夫

2. アクセス性

- ① 街側から路地等に接続する位置に坂路や階段工を設置
- ② 橋詰から堤防道路への自然な導入の工夫等

3. 空間多様性

- ① 樹木の保全、水際の工夫、河川の単調化抑制
- ② 利活用可能なオープンスペースや立ち留まりスポットの確保
- ③ 構造の切り替わり部分への配慮(分節)等

4. 安全・安心性

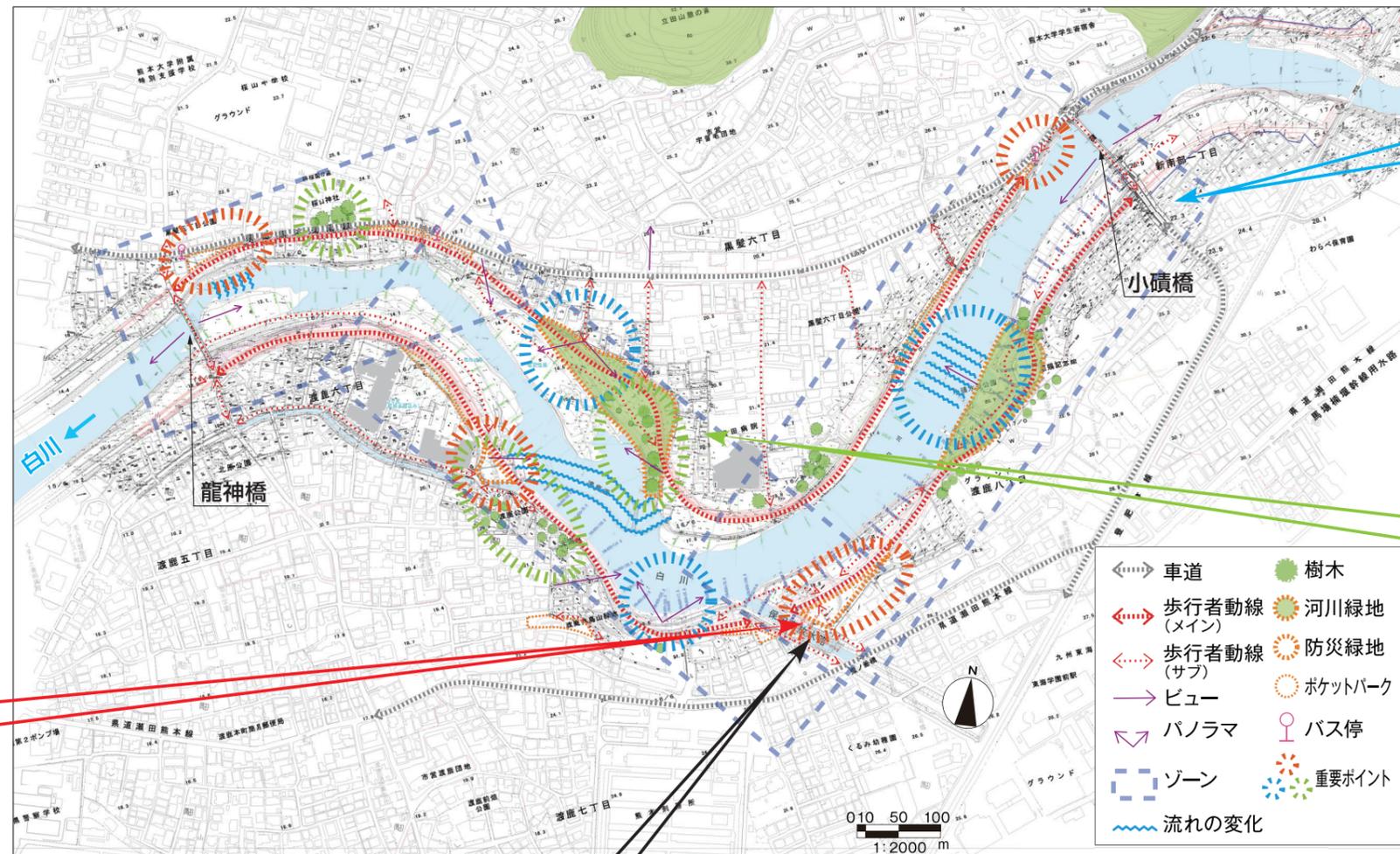
- ① 堤防の整備 ② 階段 ③ 防災拠点の整備等

1 回遊性

堤防管理用通路が保田窪放水路で分断されるため、管理用の橋梁を設置しました。



▲周回通路は、多くの歩行者、自転車の利用が想定され、快適性、安全性の確保に配慮し、川側のパラペット上部には丸みをもたせ、人が寄りかかれるような形状にしました。



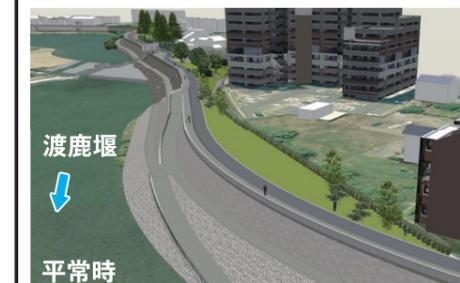
- 車道
- 歩行者動線(メイン)
- 歩行者動線(サブ)
- ビュー
- パノラマ
- ゾーン
- 流れの変化
- 樹木
- 河川緑地
- 防災緑地
- ポケットパーク
- バス停
- 重要ポイント

4 安全・安心性

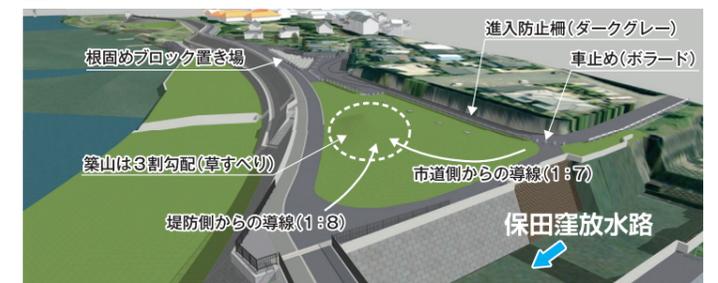
平成24年7月出水における市街部での水防活動において、大型土のうに詰めるための土や根固めブロックなどの資材の運搬に非常に時間を要しました。

そこで、安全・安心を高めるため、資材の備蓄や作業を行うためのスペースなどを確保するための防災拠点の整備を行いました。

渡鹿堰左岸防災拠点



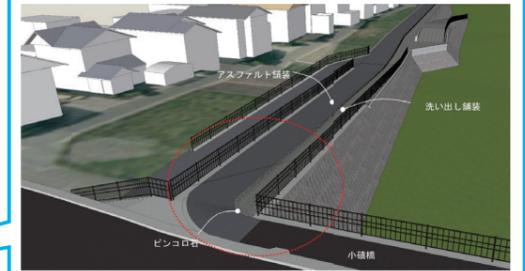
保田窪放水路上流防災拠点



◀水防時に堤防を守る工法の一つである「木流し工法」に活用できる樹木を拠点両端に植栽しました。(ネズミモチ、カクレミノ)

2 アクセス性

小碓橋から自然と堤防へアクセスするため、角を曲線にしました。



3 空間多様性

渡鹿堰右岸の下流は、川が民地側に大きく膨らんだオープンスペースについて川側の堤防を緩傾斜にして、周回通路のどこからでも、水際にアクセス出来るようにしました。

また、移植や植樹を行い、従前に近い植生環境を創出します。



- 法勾配は3割程度
- スロープ(幅2m、勾配5%)
- 植生環境の創出



関係者のご協力のもと令和2年1月に整備完了

平成24年11月に採択された白川河川激甚災害対策特別緊急事業が完了を迎えました。
多くの地元関係者、学識者、建設業者、設計業者、その他関係された皆様のご協力のもと、全ての整備を完了することができました。

